

草原再生の取り組みを進めるためには、牧野組合の方々をはじめ、地元の活動団体、都市住民、将来を担う子供たちなど幅広い方々の参加、協力が必要です。そこで、さまざまな人々の参加による事業を積極的に展開するとともに、参加の輪を広げていくための試みを進めています。

THEME 03

再草原化に向け野焼き再開の準備を始めました

野焼きがされていなかった原野の一部の野焼きを再開し、その後の経過を検証する実験的な取り組みが、南小国町慈門坊牧野をモデルとして始まりました。10月はじめ、環境省、財団法人阿蘇グリーンストック、土地所有者の南小国町及び慈門坊牧野組合が、「慈門坊牧野の野草地再生及び維持管理保全に関する協定」を締結。16年ぶりの野焼き再開に向け、10月9日には、牧野組合関係者約40名、グリーンストックの野焼き支援ボランティア39名で輪地切りを行いました。繁茂した雑木をとりぞきながら、幅10mの防火帯を約3.5kmにわたって切り開く作業は、か

なり大変なものでした。同月23日には、地元の人22名、ボランティア21名が集まり、輪地焼きを行いました。

牧野組合は、今後もボランティアの支援を受けながら、野草地の管理を行っていききたいとのこと。



16年ぶりの野焼き再開に向け、ボランティアの支援による輪地切りが行われました。(平成16年10月9日)

THEME 04

草小積みが復活しました

草小積みの風景は、阿蘇ならではの景観で観光資源としても重要であることから、環境省ではJA阿蘇の協力を得て、草小積みを再現する事業を行いました。

かつては採草が終る11月頃になると、草原のあちらこちらに草小積みが見られましたが、



やまなみハイウェイ沿いの草小積み

採草の減少や草を車で持ち帰ってしまうことから、最近ではほとんど見られなくなりました。

今回再現したのは、阿蘇町と一の宮町を走るミルクロード、やまなみハイウェイ、国道265号箱石峠までの沿線の道路から見える場所で、作業には6牧野が参加し、11月末には約160個の草小積みが登場しました。

今はめずらしくなった作業風景をビデオカメラに収める熱心な観光客の姿も見られました。

インタビュー 草原再生への期待



佐藤豊和氏

南小国町酒蔵寺在住 畜産・農業 阿蘇地方青年農業者クラブ連絡協議会会長 小国町4Hクラブ一志会会員

畜産農家に生まれ、小学生の頃から将来農業に従事することを志し、農業高校卒業後すぐに地元に戻って農業を始めました。今年で8年目を迎えますが、その間に、あか牛を20頭増やしました。

これからもっと飼育頭数を増やし、繁殖だけでなく肥育までの一貫経営を行い、さらに、あか牛肉の直販にも取り組んでいきたいと考えています。

しかし、規模を拡大するには放牧する場所や牛の餌となる野草を刈る場所が不足気味です。個人でできることは限界がありますが、組織的にやれば、新たな野草の採草地の確保や安く草を購入できる流通のしくみができるのではないかと期待しています。

また、4Hクラブの代表としては、もっと自分たちの活動をPRし、若い新規就農者を増やしていければと思っています。